

〔付 録〕

ハイチ・ドミニカ共和国関係文献解題

尾尻希和・久松佳彰・狐崎知己

※著者のあいいうえお順に掲載しています。また、解題末尾には、おおよその記述分野をカッコ書きしています。

荒井芳廣著 2000.『ハイチ文化論考』小林出版.

【解題】ラテンアメリカ民俗の研究者によるハイチ論。すでに発表された論文を集めたもので、テーマが幅広いのが特徴。ハイチ語（クレオール語）の悪態表現の分析は圧巻。〔ハイチ・文化〕（尾尻）

アンチオープ、ガブリエル著 / 石塚道子訳 2001.『ニグロ、ダンス、抵抗：17～19世紀カリブ海地域奴隷制史』人文書院.

【解題】カリブ海地域史の専門家による、カリブ・ダンスをテーマとした歴史学。奴隷たちの生活についての研究が少ない中、奴隷たちの表現方法のひとつとしてダンスを位置づけている。奴隷たちの生活の一端を知ることができる。〔カリブ海地域・歴史〕（尾尻）

石塚道子著 1991.『カリブ海世界』世界思想社.

【解題】日本におけるアカデミックなカリブ研究の先駆的な論文集。地域研究の要素が強いうえに序章として「カリブ海世界とは」を設けているので初心者にも読みやすい。〔カリブ海地域・地域研究〕（尾尻）

石橋純著 2002.『熱帯の祭りと宴：カリブ海域音楽紀行』柘植書房新社.

【解題】ハイチの呪術について一章、メレンゲはどこから来たかについて一章、ドミニカ共和国の音楽について一章を含んでおり、カリブ海域を音楽という切り口から紀行している。〔カリブ海地域・芸術〕（久松）

ウィリアムズ、E. 著 / 川北稔訳 1978.『コロンプスからカストロまで：カリブ海域史、1492～1969 I, II』（岩波現代選書 6, 7）岩波書店.

【解題】カリブ海のトリニダード島出身の歴史家が描く壮大なカリブ史。スペイン語圏、英語圏、フランス語圏など、言語で引き裂かれたカリブ研究界にあって、ハイチ革命からキューバ革命を網羅する、まさにカリブを一体的に捉えた貴重な力作。「カリブを見れば世界がわかる」ことが実感できる。〔カリブ海地域・歴史〕（尾尻）

上田秋助著 1988.『アディオス・ミ・サント・ドミンゴ：欺かれた一ドミニカ移住者の記録』南の風社.

【解題】10歳の頃に高知から一家四人でドミニカ共和国に移住し、5年後に帰国した著者が、ドミニカ移民の実際を自分の経験を含めて調査し、執筆した記録。〔ドミニカ共和国・日本人移民〕(久松)

馬越栄, 寺尾英夫編著 2006.『ドミニカ共和国古老談：ドミニカ日本人残留移民の証言』北欧商事出版.

【解題】日本人移民による想像を絶する過酷な体験、それを乗り越えたたくましさを残したいと、農業専門家と医師が聞き書きを行った貴重な証言の書。〔ドミニカ共和国・日本人移民〕(久松)

遠藤泰生, 木村秀雄編 2002.『クレオールのかたち：カリブ地域文化研究』(アメリカ太平洋研究叢書) 東京大学出版会.

【解題】先住民がほぼ絶滅した中、外部から強制移住してきた人たちの子孫が現在のカリブ人である。本来は「現地生まれ」という意味の「クレオール」が、カリブ人たちのアイデンティティを問うキーワードとなった。様々なクレオール性の分析が集められた論文集。〔カリブ海地域・クレオール研究〕(尾尻)

オビエード著 / 染田秀藤, 篠原愛人訳 1994.『カリブ海植民者の眼差し』岩波書店.

【解題】スペインで1535年に出版された『インディアスの博物誌ならびに征服史』の日本語訳。何事にも興味をもって調べ、記録する著者が描くカリブ人とヨーロッパ人の出会い。カリブ人がタバコを吸うことや同性愛が一般的なことに驚きを表明している。〔ドミニカ共和国・歴史〕(尾尻)

加茂雄三著 1996.『地中海からカリブ海へ』(これからの世界史 6) 平凡社.

【解題】日本のラテンアメリカ研究の先駆者による中米・カリブ史の入門書。コロンブス以後、冷戦終結までが概観できる。砂糖、コーヒー、タバコ、カカオ、バナナなど私たちに身近な嗜好品が中米・カリブに及ぼした影響について考える機会を与えてくれる。〔カリブ海地域・歴史〕(尾尻)

カルペンティエル, アレホ著 / 木村榮一, 平田渡訳 1992.『この世の王国』水声社.

【解題】黒人奴隷を主人公に据え、ハイチ史上重要な3人の人物を魔術的に語った歴史小説。ヴードゥー教の世界、植民地の白人社会、ハイチでの革命を取り扱っている。著者は「厳密な考証に立って創作されている」と序で述べている。〔ハイチ・芸術〕(久松)

キダー, トレーシー著 / 竹迫仁子訳 2004.『国境を越えた医師』小学館プロダクション.

【解題】ハイチへの援助や国際協力、もしくは一般に公衆衛生分野の援助や国際協力を考える時に米国医師・人類学者ポール・ファーマーの足跡を辿ることは必須の作業であり、本書がその導き手になる。ファーマーにピュリッ

ツァー賞作家が密着取材をおこない彼の全体像を浮き彫りにしたノン・フィクション作品。ファーマーの意見に批判的な意見をもつ人も、彼の人類愛には圧倒されるだろう。〔ハイチ・国際協力〕(久松)

国本伊代編著 2013.『ドミニカ共和国を知るための60章』明石書店.

【解題】おなじみの「～を知る〇〇章」シリーズ。歴史、文化、社会、政治、経済がコンパクトにまとめられている。〔ドミニカ共和国・一般〕(尾尻)

窪田暁著 2016.『野球移民』を生み出す人びと：ドミニカ共和国とアメリカにまたがる扶養義務のネットワーク』清水弘文堂書房.

【解題】野球移民を通じてドミニカ社会を解明する試み。カジュアルな雰囲気、表紙とは正反対のアカデミックな分析。闘鶏のように育成される選手と、成功者の施しに群がる人々。これを読めば文化人類学がわかる、そしてメジャーリーグやプロ野球を見る眼が変わる。〔ドミニカ共和国・文化〕(尾尻)

グリーン, グレアム著 / 田中西二郎訳 1980.『喜劇役者』(グレアム・グリーン全集 19) 早川書房.

【解題】世界的に有名なイギリスの小説家がハイチを舞台に書いた小説。ババ・ドック政権を皮肉たっぷりに批判している。同時にトントン・マクートの暴力が引き起こす恐怖を外国人の眼から体験することもできる。この小説をもとにした映画も公開されたが、当然のことながらハイチで撮影できないために西アフリカのダホメ王国(現ベナン)で撮影された。〔ハイチ・芸術〕(尾尻・久松)

今野敏彦, 高橋幸春編 1993.『ドミニカ移民は棄民だった：戦後日系移民の軌跡』明石書店.

【解題】学者、ジャーナリスト、弁護士などで構成された調査チームがドミニカ移民について取材・研究をおこない、まとめた報告。他の日系移民についての記述もあり、まとまっている。〔ドミニカ共和国・日本人移民〕(久松)

佐藤文則 文・写真 2003.『ダンシング・ヴァドゥー：ハイチを彩る精霊たち』凱風社.

【解題】フリーの貧乏カメラマン(本人談)によってヴァドゥーを通して描かれるハイチ民衆の姿。ヴァドゥーの神秘的側面と人間的側面の両方が描かれる。「精霊は悪魔ではない。人間が精霊を悪魔に変えるのだ」という、ある司祭の含蓄ある言葉に感動。著者が暴徒化したデモ隊から逃れるシーンも見もの。〔ハイチ・文化〕(尾尻)

—— 文・写真 2007.『慟哭のハイチ：現代史と庶民の生活』凱風社.

【解題】おなじ著者による1999年の『ハイチ：目覚めたカリブの黒人共和国』の増補改訂版。報道ジャーナリストである著者が、デュバリエ政権崩壊後の1988年にはじめてハイチを訪れるところから始まる。二度にわたるアリストイド政権の誕生と崩壊の混乱の中を生き抜く大衆の姿を命がけで撮っ

た写真とエピソードの数々。〔ハイチ・文化〕(尾尻)

シーブルック, W. B. 著 / 林剛至訳 1969.『魔法の島：ハイチ』大陸書房。

【解題】アメリカ合衆国がハイチを占領統治した1915-1934年の間に、医師としてハイチに滞在した白人アメリカ人の手記。人種差別感情のまったくくない著者であり、ハイチ人と積極的に交流しようとするが、ハイチ人からも他のアメリカ人からも反発される当惑が描かれる。〔ハイチ・歴史〕(尾尻)

ジェームズ, C. L. R. 著 / 青木芳夫監訳 / 石塚道子・武田とし子協力 1991.『ブラック・ジャコバン：トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命』大村書店。

【解題】フランス植民地時代のハイチで「ハエのように死んでいった」奴隷たちの惨状と、そこから立ち上がるハイチ人の戦い。「自由人」と「奴隷」という黒人の中の亀裂や「ムラート」と「黒人」というハイチ人の中の亀裂にも目を背けずに、革命運動の様々な矛盾も明らかにしている。ハイチ革命の不朽の名著。〔ハイチ・歴史〕(尾尻)

シャモワゾー, パトリック, ラファエル・コンフィアン著 / 西谷修訳 2004.『クレオールとは何か』(平凡社ライブラリー 507) 平凡社。

【解題】クレオール文学の「導火線」のひとつは、奴隷船の恐怖であったという。大学の「正統な」文学論を「牢屋」と断じる著者の、型破りなクレオール文学論。カリブ史の理解とともに、ハイチ文学を理解するのに役立つ。〔カリブ海地域・芸術〕(尾尻)

須藤昭子著 2010.『ハイチ復興への祈り：80歳の国際支援』(岩波ブックレット 794) 岩波書店。

【解題】戦後の日本で結核治療に打ち込んだ女性医師が、こんどは1970年代のハイチで結核患者の治療に挑む。まずは医師免許の書類手続きに1年以上かかって…。入院患者同士のけんかや、自分が新所長だと嘘をついたハイチ人医師に対する著者の対応に学ぶところが大きい。最後の「日本の若いみなさんへ」も必読。〔ハイチ・国際協力〕(尾尻)

ゼーガース, アンナ著 / 新村浩, 初見昇, 井上正篤訳 1984.『ハイチの物語』明星大学出版部。

【解題】1980年に発表された「ハイチの三人の女」と1949年に発表された「ハイチの宴」を収めた、ドイツ人女流作家による作品集。主題は、コロンブスのカリブ到達、ハイチ革命・奴隷解放、現代の若い黒人女性の悲恋である。〔ハイチ・芸術〕(久松)

高橋幸春著 1987.『カリブ海の「楽園」：ドミニカ移民三十年の軌跡』潮出版社。

【解題】ジャーナリストである著者の現地取材に基づくドミニカ移民の歴史に関するルポルタージュ。〔ドミニカ共和国・日本人移民〕(久松)

立野淳也著 2001.『ヴェーダー教の世界：ハイチの歴史と神々』吉夏社。

【解題】主に先行研究に依拠したヴードゥー教の歴史や信仰観、儀礼の解説。ハイチ政治史におけるヴードゥーの位置づけも分析している。ハイチにおけるヴードゥーだけでなく、起源である西アフリカの宗教も取り上げていて、日本語で読めるヴードゥーの教科書といったところ。〔ハイチ・文化〕(尾尻)

ダンティカ、エドウィージ著 / くぼたのぞみ訳 2003.『アフター・ザ・ダンス：ハイチ、カーニヴァルへの旅』現代企画室。

【解題】ハイチ生まれだが12歳のときにアメリカ合衆国に移住した作家がハイチに里帰りした際のルポタージュ。ハイチ人だがハイチのカーニバルを観に行くことに恐怖を覚えることが滑稽。道路事情の悪さをハイチ人が素晴らしい言い訳で説明する。〔ハイチ・文化〕(尾尻)

——著 / 佐川愛子訳 2011.『骨狩りのとき』作品社。

【解題】ハイチ・ディアスポラ文学の旗手が描く、ドミニカ共和国在住ハイチ人の悲劇の物語。フィクションである文学が語る「真実」を実感できる貴重な小説。〔ハイチ・芸術〕(尾尻)

ドナディウー、ジャン＝ルイ著 / 大嶋厚訳 2015.『黒いナポレオン：ハイチ独立の英雄 トゥサン・ルヴェルチュールの生涯』えにし書房。

【解題】ハイチ独立の英雄トゥサン・ルヴェルチュールについてはハイチ革命以後のことしか知られていなかったが、本書はその前半生にも光をあてている。歴史学者による、現存する一次資料に基づいた、緻密な分析。〔ハイチ・歴史〕(尾尻)

ドミニカ共和国移住 50 周年記念事業執行委員会編 編 2007.『今、生きてここに在る：「カリブの楽園」哀歎の半世紀』パコスジャパン（製作）。

【解題】「ドミニカ共和国移住 50 周年記念事業執行委員会」による、ドミニカ共和国移住史の概説や、移住者による日本政府への損害賠償訴訟への総理談話や、移住者 20 名余の様々な「振り返り」を含む移民 50 年の歴史。〔ドミニカ共和国・日本人移民〕(久松)

ドミニカ共和国日本人農業移住 50 年記念誌編纂委員会編 2009.『青雲の翔：ドミニカ共和国日本人農業移住者 50 年の道』ドミニカ日本人移住 50 周年記念祭執行委員会記念誌編纂委員会。

【解題】「ドミニカ共和国日本人農業移住 50 周年記念誌編纂委員会」による、ドミニカ移住 50 周年記念式典の概略や、30 人以上の移住者の振り返りと 20 人以上の若者世代の主張を含む移民 50 年の歴史。〔ドミニカ共和国・日本人移民〕(久松)

浜忠雄著 2003.『カリブからの問い：ハイチ革命と近代世界』岩波書店。

【解題】同じ著者の『ハイチ革命とフランス革命』に、より現代の情報を加え、初心者向けの内容にしたもの。写真も充実している。〔ハイチ・歴史〕(尾尻)

—— 著 1998.『ハイチ革命とフランス革命』北海道大学図書刊行会.

【解題】日本におけるハイチ革命研究の先駆的著作。フランスの事情に詳しい研究者だからこそ完成した、フランス革命とハイチ革命の深いかわりを明らかにした書。「黒人法典」などの史料も充実。〔ハイチ・歴史〕(尾尻)

バルガス＝リョサ, マリオ著 / 八重樫克彦, 八重樫由貴子訳 2011.『チボの狂宴』作品社.

【解題】ノーベル賞作家がトルヒージョ独裁の誕生から崩壊までを独裁者として取り巻き、犠牲者、反体制派、傍観者それぞれの心情と行動を絡めて描き切った大作。潔癖な外見を装う独裁者が高齢化に怯え、疑心と孤独に苛まれていく有様とこれを冷徹に見限る側近バラゲルとの心理劇が見事。〔ドミニカ共和国・芸術〕(狐崎)

ヒューム, ピーター著 / 岩尾龍太郎, 正木恒夫, 本橋哲也訳 1995.『征服の修辭学：ヨーロッパとカリブ海先住民 1492-1797 年』(叢書・ユニベルシタス 458) 法政大学出版局.

【解題】コロンブス以降の一次資料やカリブを舞台とした世界的ベストセラーに描かれている「征服者」に内在する植民地主義を改めて検討し、カリブ海域先住民の史的再構成を行おうとする意欲作。これを読んでから「ボカホンタス」と「ロビンソン・クルーソー」の原著を読み直そう。都合の悪いことを改変している児童書ではなく、原著で。〔カリブ海地域・クレオール研究〕(尾尻)

ファーマー, ポール著 / 豊田英子訳 2012.『権力の病理：誰が行行使し誰が苦しむのか：医療・人権・貧困』みすず書房.

【解題】米国医師・人類学者ポール・ファーマーが⁹、発展途上国の貧しい人々にとっての社会的・経済的権利を訴えた公衆衛生の現場からの告発の書。第2章ではハイチ難民危機とエイズについての報道・政治を解明している。〔ハイチ・国際協力〕(久松)

—— 著 / 岩田健太郎訳 2014.『復興するハイチ：震災から、そして貧困から：医師たちの闘いの記録 2010-11』みすず書房.

【解題】世界的に有名な医療 NGO であるパートナーズ・イン・ヘルスの創設者であり、25 年にわたってハイチで活動してきた米国人医師によるハイチ震災後の救援活動の証言の書。臨床医師がなぜ政治経済分野に首を突っ込まざるを得ないのか？ NGO 共和国となってしまったハイチに自立性を回復させようと願う著者の渾身の記録。〔ハイチ・国際協力〕(尾尻)

増田義郎著 1989.『略奪の海カリブ：もうひとつのラテンアメリカ史』(岩波新書 新赤版 75) 岩波書店.

【解題】映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』の舞台となったカリブ海、海賊たちの歴史。16 世紀から 17 世紀にかけてカリブで活躍した海賊たちは、

スペインから中南米の覇権を奪おうとしたイギリスの尖兵であったことが解き明かされている。イスパニョーラ島の歴史理解に必要不可欠な砂糖産業、奴隷貿易、世界市場を手際よく理解するための第一の書物。〔カリブ海地域・歴史〕(久松)

ミンツ, シドニー・W. 著 / 川北稔, 和田光弘訳 1988.『甘さと権力: 砂糖が語る近代史』平凡社.

【解題】カリブ海地域史と熱帯性農産物に研究を捧げてきた人類学者による砂糖の歴史。章題となる「食物・社会性・砂糖」「生産」「消費」「権力」、そして「食することと生きること」を通じて、砂糖を通じて世界の中心と外縁が経験した変化を読者は追体験することになる。特にプランテーションという生産システムの理解に最適である。〔カリブ海地域・人類学〕(久松)

——著 / 藤本和子編訳 2000.『「開書」アフリカン・アメリカン文化の誕生: カリブ海地域黒人の生きるための闘い』岩波書店.

【解題】編訳者藤本和子が人類学者シドニー・ミンツからカリブ海諸島のアフリカン・アメリカン文化について講義を受けた聞き書き。アメリカ合衆国のアフリカン・アメリカン文化を相対化するジャマイカ、ハイチ、スリナムの文化を対話という特徴を生かして縦横無尽に語っている。後半にハイチのブードゥーについての説明があり、とても貴重である。〔カリブ海地域・人類学〕(久松)

メイエール, ジャン著 / 猿谷要監修 / 国領苑子訳 1992.『奴隷と奴隷商人』(「知の再発見」双書 23) 創元社.

【解題】フランス人歴史家による奴隷と黒人の歴史。約 100 枚の図版が視覚的に奴隷と奴隷貿易と黒人の歴史・文化を語っている。本文はわかりやすく、末尾に監修者の詳細な資料編を含んでいる。〔カリブ海地域・歴史〕(久松)

山本太郎著 2008.『ハイチいのちとの闘い: 日本人医師の 300 日』昭和堂.

【解題】GHESKIO (ゲスキオ, カボジ肉腫・日と見感染症研究所) で 2003 年 7 月から 10 か月間、感染症対策に従事した医学者によるハイチ滞在記。グレアム・グリーン『喜劇役者』への参照もあり、ハイチで暮らす現地感覚が伝わってくる。〔ハイチ・国際協力〕(久松)

ラウス, アーヴィング著 / 杉野日康子訳 2004.『タイノ人: コロンブスが出会ったカリブの民』(叢書・ユニベルシタス 809) 法政大学出版局.

【解題】自分たちをまとめて呼称する名をもたなかったために、多数派であったにもかかわらず、彼らにちなんだ地名が残っていないカリブ海の先住民。彼らタイノ人は絶滅してしまったが、ドミニカ共和国を含むスペイン語圏カリブ諸国にだけ、タイノ文化の片鱗が残っているという。彼らの生活ぶりとは絶滅に至る過程を明らかにした貴重な書。〔カリブ海地域・歴史〕(尾尻)

ラフェリエール, ダニー著 / 小倉和子訳 2011.『帰還の謎』藤原書店.

【解題】作家自身をモデルにした自伝小説。主人公は、亡命を余儀なくされ異国の地で「死んだ父親の魂をハイチに返す」ため、自身33年ぶりにハイチに帰国する。ハイチ人でありながら祖国にとどまることができなかったために「よそ者」になってしまった主人公の苦難。しかしハイチ滞在を通して主人公が「祖国を再発見する」過程を読者も疑似体験できる。〔ハイチ・芸術〕(尾尻)

—— 著 / 立花英裕訳 2011.『ハイチ震災日記：私のまわりのすべてが揺れる』藤原書店.

【解題】カナダに移住したハイチ人作家が、たまたま帰省している最中に2010年のハイチ大地震に遭遇した際に経験したこと、見たことをつづったルポルタージュ。「NGO 共和国」になってしまったハイチの現状を痛切に批判しつつ、30万人もの死者を出した震災という不幸を前にしたハイチの人々の姿勢が感動を呼ぶ。〔ハイチ・文化〕(尾尻)

本文献解題作成にあたっては、アジア経済研究所図書館研究情報レファレンス課長村井友子さんにご尽力いただきました。この場をかりてお礼申し上げます。

(編者)